

非通常戦 (Unconventional Warfare)

国家と武力紛争の視点から

長尾 雄一郎

1. はじめに

戦争とは国家間の戦争である。これが、我々が戦争について考え語るときの規範的概念となっている。そして、それには歴史的な理由があったのである。すなわち、武力紛争を文明的に行おうとする 17 世紀人、18 世紀人の知恵の生み出したものであった。それ以外の形態の武力紛争は禁じられた。とはいえ、20 世紀に入り、そのような野蛮な武力紛争は増大の一途をたどった。それでも、依然として、国家間の戦争パラダイムは力強さを失っていない。その一方、9 月 11 日のテロは世界中を驚愕させた。そして、「新しい戦争」「非対称戦争」といった言葉が広く流布し、多くのことが語られてきた。冷戦終結後、エスニック紛争や大規模テロが増大し、非通常戦が目立つようになった。このような中、本報告では、国家間の戦争を歴史的に省みつつ、これを参照基準として、武力紛争全般の中における非通常戦の意味を考察したい。

2. 非通常戦とは何か

本報告が対象とする「非通常戦」について明らかにしておくことが、議論の明確化のために必要である。「非通常戦」の反対概念は「通常戦」であり、通常戦とは、正規の国軍同士の戦闘を意味するものである。従って、「非通常戦」という語は、それ以外の武力紛争全てを包含する総称としてある。ある事典に従えば、具体的には、革命戦争（この革命戦争の主たる構成要素は破壊転覆活動（subversion）とゲリラ戦である）、コマンドによる奇襲攻撃や特殊作戦、テロリズムとカウンターテロリズムといったものが非通常戦に挙げられている。そして、核戦争、生物兵器や化学兵器を使用した生物・化学戦は、非通常戦には含まれないものとされる¹。なお、ここで注意を要するのは、この定義においては、非通常戦を戦う主体については特に何の定めも含まれていないことである。すなわち、私的な武力集団間で非通常戦が戦われるし、国家間の戦争においても非通常戦が戦われることがある。本稿もこの定義に従って考察を進める。

¹ Edward Luttwak and Stuart L. Koehl, *The Dictionary of Modern War* (New York: Gramercy Books, 1991), 640-641.

3. 国家間の戦争 原罪の囲い込み

「非通常戦」の反対概念が、正規の国軍同士の「通常戦」であることから、非通常戦を語る時、参照基準となるのはあくまでも国家間の戦争である。そこには国家間の戦争が、規範的なものとして扱われている。非通常戦を論じるには、まず、国家間の戦争を歴史的に顧みることが欠かせない。

我々が知っている典型的な国家間の戦争は、17世紀から18世紀の王朝間戦争、19世紀から第1次世界大戦までの国民の戦争である。

周知のように、1648年のウェストファリア条約によって凄惨な宗教戦争が克服されるとともに、主権国家が登場した。マックス・ウェーバーの有名な定式化に従えば、国家とは一定の領域の内部で、正当な物理的暴力行使の独占を要求する人間共同体である²。主権国家登場以前に社会内に拡散していた物理的暴力手段は国家によって独占され、その行使も国家によって独占された。国家によって独占された物理的暴力行使は、具体的には警察と軍隊によって担われた。その軍隊とは、すなわち国軍である。国軍のみが戦争の正当な担い手であると位置付けられることにより、人間の原罪とも言うべき武力紛争の囲い込みがなされたのである。実際には、国家が物理的暴力の独占を完成させ、国軍のみがその行使の担い手となるのには、緩慢な歴史的過程を要したものだが、いずれにせよ、今日に至るまで、国軍がもっとも高い正統性を備えた実力集団となっている³。

(1) 王朝間戦争

王朝間戦争の時代における国家間の関係は、君主たちとの個人的関係としての色彩が濃厚であり、戦争もまた、君主間のゲームのようなものであった。そこで賭けられていた争点は、主に王位継承権、領土であって、戦争の当事者である君主は、相互に強い憎しみや敵愾心を抱くことはなかった。王位や領土など賭けられていたものと、戦争継続に要するコストを比較し、適当な時点で戦争を打ち切って講和を結ぶことができたのである⁴。この戦争に要するコストであるが、当時の諸王朝は、コストを賄えるにたりる十分な経済力（財政力）を備えていなかったのが実情である。18世紀には絶対王政が現出したが、「絶対君主」と呼ばれるにしても、現代的感覚で絶対的な権力を備えていたとみては、事の真相を見誤ることになる。当時の国家権力は、今日におけるように社会の底辺にまで及ぶ浸透力を有しておらず、国内資源を十分に動員することはできなかった。これは、当時の人民が、いまだ国民（ネーション）としての自覚を有していなかったか

² マックス・ウェーバー『職業としての政治』脇圭平訳、岩波文庫、1980年、9頁。

³ Janice E. Thomson, *Mercenaries, Pirates, and Sovereigns* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1994).

⁴ Evan Luard, *War in International Society* (New Haven, US: Yale University Press, 1987), 85-118.

らにほかならない。従って、彼らは、戦争は君主たちの戦争であるとして傍観し、戦争遂行のための資源の供出に自発的に応じることもなかった⁵。軍事力にも大きな制約が課せられていた。軍事技術的な制限はもちろんのこと、何よりも国内社会的な制約が大きかった。いうまでもなく、国民が形成されていない以上、徴兵制度など導入すべくもなく、すでに常備軍は整備されていたが、もっぱら傭兵中心に常備軍を構成せざるを得なかった。17世紀初頭、オランダに専門的常備軍が登場した。これは、オランダが通商によって富を蓄えたから可能になったことであり、この富で、兵士に規則正しく俸給を支払うことができたため、年間を通じて、軍隊を維持することができたのである。このモデルは、スウェーデン王グスタフ・アドルフ (Gustavus Adolphus) の軍隊を経て、フランスに受け継がれ、国庫によって支払われる国王直属の専門的常備軍が整備されることになった。この軍隊は、官僚制によって支えられ、厳しい規律に服する軍隊であった⁶。とはいえ、このような専門的常備軍も傭兵制度をもとに構成されていたのであり、多大な費用をかけて養ったものであったから、君主たちは軽々に戦争に訴えるのを控えざるを得なかった。

また、当時の国際システムそのものも、激烈な戦争を抑制させる内実を備えていたことも見逃してはならない。中世普遍世界 (*respublica christiana*) の分裂のなかから、諸国家が登場し、この限りでは、アナーキーな国際システムとみなされえようが、実際には、真のアナーキーというにはほど遠い。当時の諸王朝の宮廷では、フランス語がよく用いられ、諸国の王や貴族間の婚姻関係も密なものがあり、諸国の王朝間には、共通の価値、共通の言語、共通の生活様式、共通の血縁関係で支えられたコスモポリタンな社交界が存在していた。この共通の世界を枠組として、「バランス・オブ・パワー (Balance of Power)」が展開されたのである。戦争にあっては公私の区別が尊重され、戦争 (陸戦) は、当時、発展しつつあった私的な領域である市民社会を攪乱させるものであってはならないものとされ、これは比較的遵守されたといえよう。従って、通商、旅行、文化や学問の交流などは、敵国との間のそれであっても、ほとんど妨害されることなく続いたのである。当時、パスポートもヴィザもなく、市民は自由に国境を越えることができた。ところが、国民が登場すると、このような事態は変わっていく。

(2) 国民の戦争

国民の戦争は、18世紀末から19世紀初めのフランス革命によって始まる。それまでの諸国家の相互関係は、外交慣習に厳格に従って規律され、戦争は、諸国から参集した

⁵ R.R.パーマー「王朝戦争から国民戦争へ」ピーター・パレット編『現代戦略思想の系譜』防衛大学校「戦争・戦略の変遷」研究会訳、ダイヤモンド社、1989年、82-83頁。

⁶ ガンサー・E・ローゼンバーグ「17世紀の「軍事革命」」パレット編『現代戦略思想の系譜』23-51頁。

貴族が将校となって率いる専門的軍隊によって、明確な慣習に従って遂行されたものだった。けれども、政治社会の性格が変わると、戦争の性格も変わらざるをえない。君主が主権者の座から落ち、国民が主権者となると事態は変わる。フランス国家が典型的であるが、国家は、平等、自由、革命、ナショナリズムなど、なんらかの抽象的な概念に奉仕すべきものとなった。そのような国家のなかに、国民は犠牲を払うに値する価値をみいだすことができ、自発的に戦争遂行のための人的資源、物的資源を提供できるようになった。この時代において戦争が戦われる争点としては、領土問題と勢力圏の拡張をめぐる問題が多かったのであるが、これはナショナリズムの高揚と深く結びついていた。そのことを背景にして、これまでの王朝間戦争が、まのびし、時代錯誤の戦争に思えるほどに、国民の戦争は激烈なものとなっていかざるを得なかった。この激烈さは、『戦争論』を著わしたクラウゼヴィッツ (Karl von Clausewitz) に「絶対戦争」を理念型として構想させるだけのインパクトを及ぼした。そして、国民の登場は、政府、国軍、国民のトリニティ (trinity) に関する彼の定式化をもたらした。そもそも彼が、『戦争論』を著わすにいたったのは、当時のフランス国民軍が彼に大きな驚きを与えたからである。彼にとって、その軍隊は、それまでの戦争の作法に従わず、ひとつの巨大な党派的軍隊のように思えたのである。フランス軍の強さの秘密は、単に軍事技術 (師団編成など) だけでは説明できないことを、クラウゼヴィッツ、また、彼のみでなく一部のプロシャ将校団も見抜いていた。すなわち、これまでのような俸給で動く専門的軍隊ではなく、国民から成り立つ軍隊が登場したことを見抜いていたのであり、フランス軍に対抗するためには、王朝の常備軍ではなく、国民からなる軍隊を構築しなければならないことを悟ったのである⁷。国民軍を建設したいとする、これら一部の将校の努力は、ナポレオン戦争後、王政復古時代が到来したため、ただちには実らなかったが、一度、開かれた国民の時代の扉が元に関閉することはなかった。19世紀を通じて、ナショナリズムの動きは次第に強まり、この世紀の後半において、大陸諸国で本格的な短期徴兵制の採用が進み、大衆軍 (マス・アーミー) が登場するようになった。この動きは、大衆が次第に政治に登場するようになった時代の動きと見合っていた。この大衆の時代において、ナショナリズムは著しく強まり (ハイパー・ナショナリズム)、マス・アーミーとハイパー・ナショナリズムの結合したところ、戦争は激烈なものにならざるをえない。戦争は、かつてのように君主間の戦争ではなく、国民の戦争であるから、国家権力は社会の底辺にまで及び、国民もまたこれに応え、無制限といってもよい資源の動員が図られていく。敵国の市民は、もはや通商や文化交流を行なう相手ではなく、敵国民となる。第一次世界大戦がこのことをよく示し、この戦争は前線も銃後も区別のない総力戦 (total war) と

⁷ ピーター・パレット『クラウゼヴィッツ 「戦争論」の誕生』白須英子訳、中公文庫、1991年。

なったのである。

以上、簡単に、典型的な国家間の戦争の見られた王朝間戦争と19世紀の国民の戦争を概観してきた。この両者の間にはナショナリズムの有無に関して大きな違いもあったが、その反面、戦争を戦えるのは、国際社会において他の諸国家により国家として承認された国家の正規の国軍のみであるという原則が貫徹していた点においては、本質的な共通点を持っていたのである。非通常戦が多く見られるようになったのは、第一次世界大戦後の20世紀に入ってからである。

4. 20世紀の武力紛争

(1) イデオロギーと政治体制をめぐる争い

歴史的な観点からすれば、第一次世界大戦とともに19世紀は終わり、20世紀が始まる。総力戦の衝撃によって、ホーエンツォレルン家、ハプスブルグ家、ロマノフ家といったヨーロッパの名だたる王朝が倒れたものであり、アメリカの介入によって第一次世界大戦にピリオドが打たれたことから、ヨーロッパの時代は終わった。そして、ボルシェヴィキの革命とともにソ連邦の成立を見たのである。

第二次世界大戦を経験した日本人の目から見ると、第二次世界大戦まで正規の国軍同士の戦争が多く戦われたという実感をもつが、これは日本人の経験に基づく実感であって、世界的に見れば実際は異なる。第一次世界大戦末期にボルシェヴィキの革命の勃発を見たことに端的に現れているように、20世紀はイデオロギーの時代であり、「通常戦争」という語に含意されている規範に照らせば、党派性の高い武力紛争が多く見られた異例の時代である。この異例性は、例えば、ソ連邦の赤軍が国軍ではなく、党の軍隊であったことから、その一端が伺えよう。また、第二次世界大戦の主要参戦国であったナチ・ドイツであるが、それには国家性の形式はあったものの、政治の実態から見れば、特殊な政党であったナチ党によって、いわば「ハイジャック」された国家に過ぎなかった。ナチ党の特殊性は、それがSS（親衛隊）やSA（突撃隊）といった党の軍隊 これをつまるところ、プライベート・アーミーである を保有していたことからわかるであろう。冷戦期においては、党派性の濃厚な武力紛争はいっそう多くなった。20世紀の武力紛争の特徴は、党派性の濃い武力紛争の多発であり、武力紛争が戦われることになる争点としては、イデオロギー対立を伴う政治体制のあり方をめぐるものが多かったことである。17世紀から19世紀に多く見られたような類の領土問題や勢力圏といったもの、それ自体が争点になることは減った。たとえ勢力圏の拡張が言われても、それ

はイデオロギーの地政学的拡張をめぐる問題と同義であったのである⁸。かつて、ドイツの法学者、カール・シュミットは「パルチザンの戦争」の増大を予見したものであるが、このような時代において、革命戦争に代表される非通常戦が多くなるのは当然であった⁹。

(2) 冷戦期の非通常戦 革命戦争 (revolutionary war)

非通常戦の構成要素であるゲリラ戦やコマンドによる奇襲攻撃 (raid) は、古くから見られた。「ゲリラ」の語は「小さな戦争」を意味するスペイン語の *guerrilleros* に由来し、19世紀初頭のナポレオン戦争時にイベリア半島において、最初のゲリラ戦が見られた¹⁰。また、コマンドによる奇襲攻撃のような特殊作戦 (special operations) は、第二次世界大戦時、敵勢力の後方地域において展開されたものが見られた。

しかし、これらはここで問題にしたい非通常戦とは異なる。イベリア半島におけるゲリラ戦は、外来勢力 (フランス軍) に対する土着の民衆の反発に根ざす、自然発生的な反乱の要素が濃かった。第二次世界大戦時の特殊作戦は、その英雄譚がどのようなものであれ、あくまでも国家間の戦争の枠組の中で、正規軍の戦いを支援する、補助的な地位にとどまったのである。

冷戦期の非通常戦は、その多くが米ソ対立を背景にして、発展途上国を舞台に政治体制のあり方を賭け、極度に強い党派的对立を伴った革命戦争であった。この「革命戦争」という語から明らかなように、これは内戦であり、国家の正規国軍同士の戦争とは異なる。17世紀以降の長い歴史の中で内発的に国家形成を進めてきた欧米諸国と異なり、多くの発展途上地域では、欧米とは異なる歴史を経て培養された政治風土に、外部から国家が接木のように植え込まれたのであるから、その国家が脆弱な国家であって不思議ではない。ネーション・ビルディングが十分達成されていない中であっては、内戦が多発し、非通常戦が常態とならざるを得なかった。

ベトナム戦争においては、外部からアメリカ軍が南ベトナム支援のため介入したが、交戦当事者の一方の側がアメリカ軍という国軍であっても、他方の側は民衆の中にまぎれて破壊転覆活動やテロ、ゲリラ戦に訴える非正規の武装勢力 (ベトコン) であり、国家間の戦争の作法は全く通用しなかった。真の敵である北ベトナムは公式には参戦せず、しかし、浸透 (infiltration) を通じて、ベトナム戦争に事実上、参戦していた。外部勢力である中ソもまた、北ベトナムを支援していたものの公式には参戦していなかった。北ベトナムもそれを支援する外部勢力も、破壊転覆活動やテロによって、南ベトナムの国土に和戦未分化の空間を作り上げ、革命戦争を遂行したのである。革命戦争は極めて政

⁸ Luard, *War in International Society*, 119-127.

⁹ カール・シュミット『パルチザンの理論』新田邦夫訳、ちくま学芸文庫、1995年。

¹⁰ Franklin D. Margiotta, ed., *Brassey's Encyclopedia of Land Forces and Warfare* (Washington: Brassey's, 2000), 1087.

治性の高い戦いであるので、通常戦に慣れ親しんだ正規の国軍将校、特に軍事的プロフェッショナルリズムの伝統を持つアメリカ軍将校にとっては手に余るし、また嫌われるタイプの戦争であった。冷戦期には膨大な量の核兵器の存在を背景に核抑止が構築され、米ソ両国の指導者は、この核抑止の敷居（the threshold of nuclear deterrence）にたえず神経を尖らせていた。そして、この敷居を超えない範囲で注意深く、通常戦が構築され準備されたのであり、そのような通常戦が「限定戦争」と呼ばれた。アメリカ軍の多くの将校がたえず注意を払い、準備していた通常戦とは主に欧州における通常戦であった。そして、さらにこの通常戦の敷居の下、和戦未分化の空間の中で非通常戦が、注意深く展開されたといつてよいだろう¹¹。結局のところ、冷戦期においては、核戦争は一度も起こらず、通常戦は中東戦争や印パ戦争などが起こったものの、米ソが直接戦火を交えるものは一度もなかった。他方、非通常戦こそが、米国を始めとする西側先進諸国が、実際に直接かかわる実戦となったのである。非通常戦は米軍等の西側国軍にとって鬼門であったといえよう。

国軍将校、とりわけアメリカ軍将校が非通常戦をいかに嫌っていたかは、特殊部隊（Special Operations Forces, SOF）への態度に現れている。非通常戦に対応するためには、特殊部隊を整備するとともに、これらを統合的に運用することが必要であるが、実際には、アメリカにおいてその本格的な努力は1980年代に始まり、1987年になって、特殊作戦担当の国防次官補のポスト（Assistant Secretary of Defense for Special Operations and Low-Intensity Conflict）とともに、統合司令部（the US Special Operations Command, USSOCOM）が新設された。統合司令部が創設される歴史は、スーザン・マーキス（Susan L. Marquis）の書物によく描かれているが、陸海空軍のいわゆる主流の将校は、陸海空それぞれの特殊部隊への理解がなく、それどころか、陸海空三軍の主流の組織文化と特殊部隊のそれとは大きく異なるため、これらを異端視し、そのため統合司令部の創設は一筋縄では進まなかったのである¹²。ともあれ、統合司令部が創設された直後に、冷戦が終結し、ポスト冷戦の時代を迎えた。

5. ポスト冷戦における非通常戦の意義

冷戦終結後になって目だった武力紛争は、いわゆる「破綻国家」におけるエスニック紛争であり、その紛争形態は、我々が近代国家成立以来、規範としている国軍同士の戦争とは遠くかけ離れたものである。その紛争においてはクラウゼビッツが定式化した、

¹¹ Stephen J. Cimbala, *The Politics of Warfare-The Great Powers in the Twentieth Century* (University Park, Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1997), 85-86.

¹² Susan L. Marquis, *Unconventional Warfare- Rebuilding U.S. Special Operations Forces* (Washington D.C.; Brookings Institution Press, 1997).

政府 = 国軍 = 国民のトリニティは成立していない。一元的に統治する実効的な政府はもはやなく、国軍ではなく、単なる武装集団があるだけである。政治的な概念としての国民はなく、熱情に駆られた人民があるに過ぎない。先進諸国の国軍は、コンボの事例に見られるように、このようなエスニック紛争への介入を余儀なくされている。先進諸国の国軍が動員される、他の事態としては、国際麻薬密輸対策や海賊対策が挙げられよう。さらに加えて9月11日の衝撃的な事件があり、アメリカ軍を中心にタリバン攻撃が行われた。ここに挙げたケースはいずれも非通常戦が戦われる事態である。もっともタリバン攻略自体は、巡航ミサイル、爆撃機、空母などの通常兵器が動員され、通常戦に近い様相を示したが、その反面、テロの首謀者であるウサマ・ビンラディンの追跡、そして掃討という、いかにも中世的な世界に後戻りしたかのような、個人征伐を目的とする作戦が特殊部隊を中心に遂行された。冷戦期にすでに非通常戦が多く見られたが、冷戦終結後の非通常戦は、冷戦期の非通常戦とは異なる。冷戦期のそれは、米ソ両陣営対立の構図の中で遂行されたのであり、つまるところ、国家間の抗争の一手段としての非通常戦があった。他方、現在、見られる非通常戦の多くは国家間の抗争の中で遂行されるのではなく、国家と非国家主体（non-state actor）の間の非対称戦において非通常戦が戦われるものが増えた。

今後、このような非通常戦が増えるのか。武力紛争全般の中で、どのような位置付けに置かれるべきなのか。これが問われるべき問いである。

この問題を考察するには、根本的に国際秩序のあり様を検討する必要がある。我々が知っている国際秩序は、17世紀以来発展してきた、主権国家を基本単位とする国際秩序である。近年になり、この基本単位である国家に関して多くの議論がなされてきた。一つの極論として、国家の衰退・死滅を説く議論がある¹³。この議論は魅力的ではあるが、意味があるとすれば、今後、数世紀にわたる超長期のタイムスパンにおける議論としてである。なるほど、グローバル化の進む現在の世界において、経済・金融分野などにおいて国家が事態を実効的に管理する能力は減少した。しかし、それゆえに国際協調の必要性が言われているのであり、それに対応すればよいだけのことである。著者には国家、特に国民国家の生命力は強いように思われる。これは一つには世界各地で起こっているエスニック紛争の結末を見ても明らかであろう。既存の国家が破綻し、内戦が勃発しても、その後には新たな国家が生まれる。旧ユーゴスラビアが解体した後は、クロアチア、スロベニアといった国家が分離独立した。東ティモールも独立の道を歩もうとしている。これらはネーション・ビルディングに失敗した国家が改めて線引きの再設定を行い、国家の再編成を図ったものであるとみなすことができよう。

¹³ Martin van Creveld, *The Transformation of War* (New York: The Free Press, 1991).

およそ人が生きていく限り、人が人を統治しつつ安全を保障していくことが欠かせないが、そのような統治の構造として、17世紀の近代以降、主権国家が登場し発展してきたのである。最近の史的研究によれば、中世の崩壊から国家形成の黎明期においては、主権国家以外にも、ハンザ同盟やイタリア都市国家などの統治構造が生まれ、これら統治構造間の競争が行われたという。結局、ハンザ同盟、イタリア都市国家は淘汰され、主権国家がドミナントな統治構造となった。そして、他の主権国家に承認されて初めて主権国家として存立し得る国家相互承認システムが成立したのである（ウェストファリア体制）¹⁴。ヨーロッパ起源の国家という統治の構造は、その後、全世界に広がり、現在、200近い国家が存在する。この意味において国家間システムは4世紀に満たない歴史しか有しておらず、国民国家となれば高々200年の歴史しかないものであり、我々は国家以外の統治構造のオルタナティブを持ち合わせていない。それどころか、現在の国家相互承認システムのもとでは地球の隅々まで、国家という統治の構造が存在することが求められる。空白は許されない。これが我々の文明なのである。この文明の下において、国家は物理的暴力手段の正当な独占主体であり、従って国軍と警察のみが正統性を備えた武装集団である。

このようなパースペクティブから見た場合、今後の非通常戦の意味が浮かび上がる。「破綻国家」が発生し、エスニック紛争が起これば、諸国家の国軍は介入するであろう。それは破綻国家内の紛争を解決し、きちんと国内を統治し得る国家をもたらそうとなされる介入であり、そこでは場合によっては非通常戦が展開されることになる。武装海賊は、それ自体は犯罪であるが、見方によっては、本来、国家が正当な物理的暴力手段の独占を図るべきものであるのに、国家以外のアクターに暴力手段が拡散したという意味において、国家を基本単位とする国際社会に対する挑戦である。また、ウサマ・ビンラディンのケースについては、その行為は何ら建設的な代替構想を持ち合わせず、破壊だけを旨とする、文明に対する挑戦であるので、アメリカ軍を中心とする諸国の国軍によって徹底的なカウンターテロリズムの作戦が展開される。すなわち、冷戦終結後になって表面化した、さまざまな非国家主体による国家間システムへの挑戦に対し、諸国の国軍が連合して、これに対抗するという構図が描けるのである¹⁵。そして、国軍は非通常戦を中心に作戦を展開することになる。

これらの事態において対応するのは、警察か国軍かは本質的な問題ではない。要点は、国家に集中独占された物理的暴力手段が動員されるということであり、それが具体的に

¹⁴ Hendrik Spruyt, *The Sovereign State and Its Competitors* (Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1994).

¹⁵ 長尾雄一郎「軍事力の担い手の過去と将来」道下徳成・石津朋之・長尾雄一郎・加藤朗『現代戦略論』69 - 70 頁、勁草書房、2000 年。

警察か、国軍であるかは便宜の問題に過ぎない。そして、一般に、法が崩れ去り、秩序なき世界においては、軍が対応するのが適当であるということに過ぎないのである。

ここで、将来において、各国の国軍はこの種の非通常戦だけに備えればよいと考えては誤りであろう。言い換えると、国家間の競争は今後とも続くであろう。それは、アフガニスタンの将来をめぐる、関係諸国の間で地政学的思惑が渦巻いていることから明らかであろう。国際秩序は今後とも、国家を基本単位とする国家間システムであることは何ら変わりなく、そこでは国家間の競争は依然として続く。しかし、他面において、国家形成の未熟な地域では、「破綻国家」の問題が生じたり、巨大なテロ事件が発生し、国家間システムへの挑戦が見られた場合には、諸国家は一致して、この挑戦に対応するであろう。この後者の挑戦に応えるべく、現在、いわゆる軍隊の新たな役割が生まれているのであり、この意味において非通常戦の比重はいつそう重くなるとは言えるであろう。今日の国際軍事情勢の一大特徴は、各国の国軍が協力しあって、非国家主体に対処することが増えたことである。タリバン攻撃やアルカイダに対するカウンターテロリズムがそうであるし、「破綻国家」における平和維持活動や平和強制活動もそうである。我々はいわば「軍事の国際化 (Internationalization in Military Affairs)」の時代を迎えつつある。そして、この時代においては、非通常戦の占めるウェイトが重くなるはずである。

この見通しは実践的に重要な意味を持つ。防衛力整備の観点からは、国家間競争に根ざす、伝統的な通常戦の能力を備えるとともに、特殊部隊を整備しつつ非通常戦を戦う能力をも培うことが求められることになる。